

盆の傘鉾 1

— 依代としての傘 —

段 上 達 雄

【要 旨】

佐伯市米水津宮野浦や色利浦に伝わる盆の傘鉾は物故者の遺品を吊り下げたりするが、地元では傘鉾に故人の霊を憑依させるためと考えられている。同様なものは、三重県志摩地元や高知県宿毛市沖の島にも見られ、志摩の漁民による伝播の可能性が考えられる。

【キーワード】

初盆供養、故人の遺品と傘鉾、憑霊、大分県佐伯市米水津、三重県志摩地方など

はじめに

平成2年(1990)、米水津村(現在の佐伯市米水津)宮野浦と同村色利浦の盆行事を調査する機会に恵まれた。村の古老たちに囲まれて、盆行事の話を聞く中で、盆の傘鉾の存在に強く関心を持つようになった。それまでに大分県内の宇佐市安心院町の盆の傘鉾も中津市の鶴市八幡神社の傘鉾祭りなども見ていた。しかし、この地方の盆の傘鉾は故人の霊魂が依り憑くのだという話に、私は大きな衝撃を受けた。私が全国の傘鉾や風流傘に興味をもつようになった契機は、実はこの米水津村の盆行事の調査だったのである。

(1) 米水津の盆の傘鉾

大分県佐伯市米水津地区宮野浦の供養盆踊りは、とむらい踊りとも呼ばれる。かつては4年に1度行われ、その頃はヨリ月のある年(旧暦閏年)は4年目でも実施せずに翌年に催していた。平成20年頃から隔年となり、平成23年から毎年開催するようになった。

供養盆踊りは8月15日の夜8時頃から公民館前の広場で行われる。それより前の4年間に家族を亡くした新仏の家が傘鉾を出す。

広場中央に音頭棚といって高さ約4mの櫓を組む。上部の床には音頭取りが立ち、下段の床に囃し



写真1：宮野浦の供養盆踊りの傘鉾

子たちが座る。音頭棚の傍らに太鼓をすえる。音頭棚の周辺には、南方だけ残してコの字形に棚を巡らし、その棚に物故者の位牌と遺影を供える。

傘鉦とは開いた傘を物故者の着物で覆い、兵子帯やしごきなどで縛って竹竿の先に装着したもの。故人が使用していた傘を用いた。竿の途中に提灯を結び付ける。長い竿を使う人がいたが、移動に都合が悪いので、平成元年からは長さ3mに制限した。昔は蛇の目傘(和傘)だったが、現在(平成24年)では地区が黒い洋傘(コウモリ傘)を用意している。家から傘鉦を持参する時、竿に付けた傘を傘深に(少し広げて)差してくる人もいるし、広場で竿に結び付ける人もいる。物故者の遺影を飾る棚の前の柱に傘鉦を縛りつけて立てる。

夜の12時頃に盆踊りは終了する。終了30分前に少し休憩があり、遺影と位牌と傘鉦を持った遺族が出てきて音頭棚の周りに輪になる。傘鉦の提灯に点灯する。「切り音頭」が歌われ、遺族たちは音頭棚を中心に3周廻る。遺族は悲しみを表すためにゆっくりと歩く。3周回ったら棚の前で待機して、切り音頭が終わり次第、急いで帰宅する。

物故者の霊は傘鉦の上に乗っており、帰宅途中で傘鉦を傾けると、そこに霊が落ちてしまうので、出来るだけ垂直に傘鉦を支えて運ぶという。家に戻ると、縁側から仏壇に向かって傘鉦を捧げ入れ、帯を解いて着物をはずす。

宮野浦に隣接する米水津地区色利浦の供養盆踊りにも傘鉦が登場する。ここでも供養盆踊りはトモライ(弔い)踊りともいう。現在では毎年実施しているが、ここもかつては4年に一度行い、旧暦閏年は避けたという。供養盆踊りは午後8時頃から始まる。幹集落センター前の広場中央に音頭棚を作り、周囲に祭壇をめぐらせ、その外に太鼓を置く。祭壇に物故者の位牌を供え、その前の敷物に遺族が座る。祭壇の前に傘鉦を立てる。竹竿の先に蛇の目傘をつけ、柄に物故者の着物等、例えば浴衣やヒトエモ(単衣物)、帯、ネクタイなどを結び付ける。開いた傘の傘骨の先に細く切った障子紙に線香を糊付けしたものを一本ずつ下げている。最後の「切り音頭」の前に、「アイノマ(合いの間)」が入り、その間に物故者の遺族は



写真2：宮野浦の傘鉦



写真3：宮野浦の傘鉦



写真4：色利浦の供養盆踊り 1990年



写真5：色利浦の傘鉦

傘鉾を倒して、線香に火をつける。アイノマでは音頭取りは唄わず、太鼓の伴奏で踊り手の一人が唄う。遺族たちは傘鉾を持った喪主を先頭に、位牌、遺影の順で踊りの輪に参加し、同じ隣保班の踊りの列に加わる。傘鉾の線香が消える頃に切り音頭も終わり、傘鉾を持って帰宅する。

新仏が憑依する傘鉾 供養盆踊りにおける傘鉾に新仏の靈魂が乗っているという考え方が、宮野浦と色利浦双方で見られることは重要である。それぞれ傘鉾の設えは違っているが、いずれも物故者の遺品を傘鉾に結びつけ、特定の靈魂を憑依させることを意識していたことは間違いない。また、宮野浦の迎え提灯も無視することはできない。14日の精霊迎えに小さな子供が迎え提灯とって、笹に吊った提灯を持って墓地に行き、その提灯に新仏の靈魂を憑依させて家に連れ帰るのである。宮野浦では傘鉾の柄の途中にも提灯が吊り下げられており、傘鉾だけではなく、提灯も憑依の対象となっているものと思われる。

米水津地区の傘鉾を伴う供養盆踊りの由来は明らかではない。現在、宮野浦と色利浦でしか行われていないが、かつては佐伯市蒲江町竹野浦河内と同市鶴見町梶寄でも行われていたという。



写真6：色利浦の傘鉾

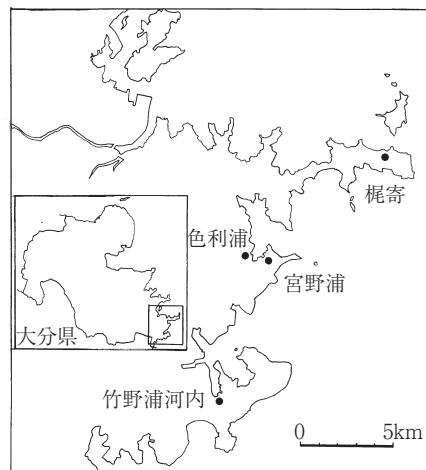


図1：佐伯市の盆の傘鉾分布図

(2) 志摩地方の傘鉾

平成3年春に刊行された『大分県の民俗芸能』（大分県教育委員会刊）に、詳細調査として「米水津村の供養盆踊り」を報告した。その末尾に「物故者の遺品等を盆の傘鉾に結びつける習俗は、三重県志摩地方の神島・波切・志島のカサブク（傘奉供）や高知県宿毛市の沖の島でも見られる。大分の県南の海岸部には、紀州漁民が開発したと伝える所（蒲江浦）もあり、黒潮の流れに乗った漁民たちが伝えた文化のひとつと考えることができる」と記したことがある。

大分県佐伯市米水津の傘鉾も志摩地方のカサブクも、いずれも太平洋側の海岸部に位置する。黒潮とその沿岸反転流を用いた沿岸航路によって、文化伝播があったと考えられる。現存例の多さから、志摩

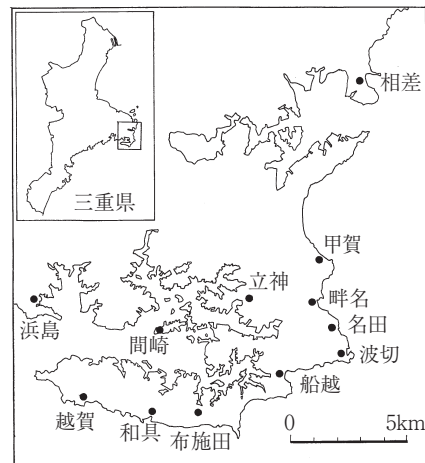


図2：志摩地方の盆のカサブク分布図

地方の習俗が漁民の移動等にもなって大分県南海岸部に伝えられたのであろう。

志摩地方に行き、波切と甲賀でカサブク(傘ぶく)の登場する大念仏という行事を現地調査し、盆の傘鉾について実見することができた。

大分県佐伯市米水津の盆の傘鉾と同様に、物故者の遺品等を盆の傘鉾に結びつける習俗は、三重県志摩地方の海岸部にも見られるが、距離の遠さにもかかわらず、同様な伝承があることは貴重である。志摩地方では、志摩市波切、船越、和具、畔名、名田、布施田、越賀、間崎、浜島、立神、鳥羽市相差などの大念仏にカサブクが登場する。個人の遺品を下げた傘ぶくを櫓の周りを持って廻るのである。中には立神のように大念仏では堂内に傘ぶく一対が吊り下げられる所もある。また、甲賀では大念仏と鼓踊が行われ、4基の傘ぶくが登場する。いずれも新亡者(故人)の霊が宿ると考えられている。

志摩地方のカサブクは、カサボクとかカサボコとも呼ばれ、傘奉供とか傘福と書かれることがあるが、畔名や布施田でカサボコと呼んでいることから、本来は傘鉾であったと思われる。傘鉾の鉾という名称は仏教行事と考えられている盆行事には、あまりにも神道的すぎると考えられたものと推測される。それでは、次に志摩地方のカサブクについて紹介する。なお、前後の行事等に詳細な情報がある場合は最後に事例として記す。

波切の大念仏

三重県志摩市大王町波切では、8月14日午後4時半頃から波切港の魚市場前広場で新亡者の供養の大念仏が行われる。3ヶ寺共同の檀家の新亡を供養する大念仏である。前年の8月13日からその年の8月12日までに、仙遊寺、大慈寺、桂昌禅寺の3ヶ寺で葬式を出した檀家の新亡者と、寺入りして波切で祀る新亡者を祀るが、仏教信者であれば、もらい念仏といって参加することが許されている。平成4年には本念仏59名で、貰い念仏10名であったが、平成20年には本念仏20人、貰い念仏37人と逆転している。14日早朝から、新亡の家の人たちが大念仏の会場設営をする。昔は宝門の浜で大念仏を催していたが、護岸工事でできなくなり、波切墓地の供養場で行うようになり、駐車場確保などの理由で、現在は波切漁港前の広場で実施されている。中央に櫓を建て、その傍らに鉦打ちの太鼓と鉦1基ずつ据える。広場の東端に総牌屋形(念仏小屋)という大型の家型テントを建てる。開始時間になると、新亡の家の代表者が挨拶をする。故人に最も近い近親者が用意していた傘ぶくを開き、親類縁者数名を引き連れて広場に出る。傘ぶくを持った人たちが輪になって並ぶ。幟持ちの子供たちも傘ぶくの輪の内側にもうひとつ輪を作る。太鼓と鉦が打ち鳴らされると、傘ぶくと幟の輪は反時計廻りでゆっくりと歩き出す。傘ぶくの後ろから女性が団扇であおぐ。最初に大念仏を受けるのは、元屋の新亡(最高齢で亡くなった男性)である。名呼びが新亡の名を呼ぶと、太鼓と鉦が打ち鳴らされ、遺族が名呼びのところに行って焼香する。一霊ごとに太鼓を33打(昔は66打)鳴らす定めになっている。打ち終わると、太鼓打ちが合図して、死亡日



写真7：波切の大念仏



写真8：波切のカサブク

時の順に名呼びが新亡の名前を読み上げ、同様に太鼓と鉦を打ち鳴らす。その間、傘ぶくと幟を持つ人は休むこともなく歩き続ける。途中、「ガチャガチャを始めて下さい」という声がかかると、子供たちは一カ所に集まって、幟の打ち合いをする。幟の紙がちぎれて無くなると、子供たちは幟の竿を捨てて輪の外に出る。傘ぶくの行進はそのまま続き、親類縁者や友人、仕事の取引先の人など、友人知人が次々に交代して捧持して供養する。4時頃から3時間ほど輪になって歩き続ける。3時間ほどして、最後の貰い念仏が終わると、大念仏の行事も終了する。

大念仏が終わると、その夜から16日の夜まで同一会場で盆踊りが催される。この盆踊りには、大念仏の会計から助成金が出ており、大念仏に伴う精霊供養の踊りと意識されていることは間違いない。

カサブク（傘ぶく）は直径約1.4mほどの唐傘の周囲に幅40～60cmほどの薄い白布を垂らす。この幕には新仏の戒名、屋号、故人の俗名、行止□歳（享年）等を書いた紙（縦1尺、横2尺）を貼る。傘の中にはさまざまな物が吊り下げられている。物故者が男性か女性かで、その内容に少し違いがある。共通するのは提灯、総角、数珠、数珠袋、扇子、剃刀、爪切り（毛抜き）、櫛とムショアゲ、茄子、ササゲの10品で、男性の場合は角帯と印籠が加わり、女性の場合は、故人の髪の毛、櫛、鏡、和鉞などが加わる。傘を含めて13品になるようにするという。「大念仏執行要領」によれば、男性は「番傘、提灯、印籠、煙草入れ、角帯、玉結、ささぎ、茄子、爪切り、小刀、数珠、毛抜き、しきび、むしよあげ」で、女性は「番傘、提灯、扇子、遺髪、鏡、櫛、かんざし、玉結、ささぎ、茄子、挟み（鉞のこと）、毛抜き、しきび、むしよあげ、ずず袋」であるという。玉結びとは総角のことである。「むしよあげ」とは桃色の小さな花の咲いた草で、櫛と一緒に束ねる。なお、「むしよ」とは墓所のことであるという。

これらの傘に吊り下げる道具類は、故人が愛用したものだったという。しかし、生活様式が変化した現在、一般の家庭がカサブクを用意するのは困難になってきており、波切農協が和傘を貸し出し、葬儀社が傘に吊る道具類を用意してくれるようになったという。

船越の大念仏

三重県志摩市大王町船越では8月13日に施餓鬼と大念仏が行われる。午後3時から公民館前の広場で大念仏が催される。広場中央の櫓の傍らに踊り爺々たちがいて、それを中心に傘ボクなどが、反時計廻りに廻る。新亡の家族や知人たちは、傘鉾の後ろに並び、常香（時香盤型の香炉）、レンゲ（造花の金蓮）、お茶（天目台に載せた茶碗にお茶を入れてある）の順に付き従う。少年たちが紺地に白で南無阿弥陀仏と染め抜かれた幟を担いで、輪の内側を廻る。「名のり」といって、新亡者の名を一人ずつ読み上げる、踊り爺々たちが太鼓と鉦を打ちながら、「急ぎ給え、ランボー」と唱え、次に「七日盆に踊らぬ者は、ミシヤゲ花で水向きょう。夏帷子を浅黄に染めて、



写真9：波切のカサブク



写真10：波切のカサブクに下げるもの

今働きがぬるいやら、扇で踊りや、要が走る。ただ良いものは柿団扇、南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。なむあみだー。アモレヤ、アモレヤ」と唱える。現在、大念仏を主催するのは船越新亡施主会で、進行と踊りを担当するのは船越盆踊り保存会である。

昔、大念仏は浜辺で催されていた。浜に建てられた葦簀張りの茶屋には総牌燈籠を祀り、軒にキリコ（切子燈籠）を吊し、茶番がいて世話をしていた。その頃、踊り爺たちを迎えに新亡家から七度半の使いを出していたという。平成6年頃には祥雲寺の境内で行うようになっていたが、現在は公民館前の広場で開催している。

傘ボクは和傘の周りに白い幕を垂らす。現在は幕の色は黄色や浅黄色、緑色などもある。傘ボクを持てるのは縁者の男性だけである。傘の中には、故人が愛用していた煙草入れ、鏡、鉢、帯、数珠、手拭い、草履、十三仏（小型掛軸）、写真（遺影）、提灯などを吊す。なお、傘ボクにはそれぞれ新亡が祀られており、傘鉾の垂れ幕の一部が開いているのは、新亡が親しかった親族や知人と共に踊り、交流するためであるという。

和具の大念仏

三重県志摩市志摩町和具では8月13日に大念仏が行われる。

13日早朝に寺へ行って精霊棚にシキビで水を向けて仏様を迎える。これを水向けという。午後8時頃から八幡山の南の浜の踊り場で「迎え念仏」が行われ、浜辺を3回廻りながら鉦を打ち鳴らして読経する。続いて大念仏をやぐらの踊り場で催す。この1年間に亡くなった人たちの総供養である。浜に小屋掛けして新亡者の総牌を祀る。新亡者の傘ぶく（カサボコともいう）が2本出る。昔は新亡者の各家からカサボクを出していたが、戦後になって略され、男性と女性の物故者の施主とが、それぞれ代表してカサボク1本ずつ出すようになったという。その年の新亡者の中で最高齢者の遺族を施主と呼ぶ。傘ぶくは唐傘の柄に富士山詣での六角杖（金剛杖）を縛って柄を長くしたもので、傘の周囲に幔幕状に布を垂らし、死没者が生前使用していた遺品を吊す。男性は17品、女性は19品であったという。中央に設けられた供養台（槽）に戒名読みと僧侶などが登る。鉦と太鼓が打ち鳴らされ、僧侶の読経に合わせて、新喪の家とその親戚の人たちが行列を作る。新喪の代表は交替で傘ぶくを持ち、鉦と太鼓の囃子の中で供養台を中心に反時計回りで廻る。新亡者が女性の場合は香箱を出し、香を焚きながら廻る。この時、施主が傘ぶくを交替して持って中央を勢い良く走る。盆踊りは10時過ぎになると、「巡礼おつる」「油屋騒動」「阿漕平治」など哀調あふれた口説きが歌われるようになる。なお、和具の盆踊りでは新喪の関係者は仮装して踊る。その後、和具の人たちは御供え（現金）を持って新喪の家を拝んで廻る。新喪の家では座敷に壇を設けて丁寧な祀る。

畔名の大念仏

三重県志摩市大王町畔名では8月14日に施餓鬼と大念仏が行われる。

8月7日朝の精霊迎えでは、前浜で迎えの笹舟を5～10個流して先祖の霊を迎える。

8月13日から15日には盆踊りが行われる。現在は組長会が主催しているが、昭和40年頃までは青年会が担当していた。午後8時頃から池田浜で行われ、婦人会員など老若男女が集まって音頭台（槽）を中心に輪になって踊る。1時間ほど民謡踊りをした後、9時頃から畔名に古くから伝わる盆踊りとなる。

8月14日午後4時から臨江寺で施餓鬼が行われる。各家の先祖と戦没者を供養する並施餓鬼、新亡施餓鬼、添施餓鬼と次々に行われ、その度に水向けをする。夕方から浜で大念仏が催され、傘ほこ供養が行われる。法螺貝と鉦の囃子が入る中で、僧侶が音頭をとる。傘ほこを先頭に新亡家の家族や親類が並んで輪になり、それぞれの新亡の霊に「南無阿弥陀仏」と三度唱和しながら廻る。傘ほこは故人に関係する品々を吊り下げた傘である。

8月15日夕方には精霊送りが行われる。線香と仏壇の供物の一部を持って前浜に行き、線香に火をつけ、供物を流して先祖の霊を送る。

8月21日には新亡の家の精霊流しが行われる。

名田の大念仏

三重県志摩市大王町名田では8月14日に施餓鬼と大念仏が行われる。午後2時、光月寺で7カ寺の僧侶による亡者供養の施餓鬼が行われ、人々は先祖の霊に水向けをする。午後7時から前浜で大念仏が行われ、浜に新亡全員の戒名を記した紙張りの総牌を安置する。新亡家と重親戚（近親の親類）が故人の遺品を吊した傘ぶくを出す。地区の人たちも集まって新亡を供養する。松明を焚いて、年寄り衆が戒名を一人ずつ読み上げ、太鼓を打って法螺貝を吹き鳴らしながら、「ヤモリヤ、サヤサヤ、ヤモリヤ、サヤ」と唱える。

布施田の大念仏

三重県志摩市志摩町布施田では8月13日にお寺で大念仏が行われる。男性と女性の新喪者代表のカサボコに遺品を吊り下げ、遺族の女性が香炉を持って付き添う。鉦と太鼓が打ち鳴らされる中、カサボコの行列は何回も廻る。参列者は香炉が前に廻ってきた時、焼香して拝む。

越賀の大念仏

三重県志摩市志摩町越賀では、毎年8月13日午後3時頃から浜で大念仏が行われる。その年に亡くなった人の霊を供養する行事で、傘鉦が出る。初盆の家のために地謡じぶたいがうたわれ、初盆を迎える物故者の氏名が読み上げられる。地謡は越賀独特のもので、太鼓・鉦・笛に合わせて親類の者がうたう。初盆の家では大念仏に行く前にお膳おんこに線香を立て、大念仏の帰る前に浜に線香を立てる。盆踊りは13日から16日まで行われる。

間崎のかさぶく

三重県志摩市志摩町間崎では、毎年8月14日に間崎で盆踊りが踊られるが、その年に亡くなった人の遺品を傘に下げて供養する。

浜島のダンボ

三重県志摩市浜島町浜島では、新亡者精霊の供養のために8月13日に迎え念仏、16日に送り念仏を行う。浜島地区西早町の浜辺で行われていたが、海岸埋め立てや魚市場拡張によって現在は極楽寺境内で行われている。13日午後4時頃から、迎えダンボといって新名のり読み、香炉持ち、傘ぶく持ち、旗持ち、音頭取り、太鼓打ちなど13名が中心となって実施している。太鼓を中心に左右に廻り、太鼓の上の名のり読みが新亡者の戒名を読み上げ、「ナムアミダンボ（南無阿弥陀仏）」と称名するが、そのため浜島では大念仏のことをダンボと呼ぶようになったという。読経と焼香後に、五色十五井という料理を出す。

立神の大念仏

三重県志摩市阿児町立神では、5年ごとの8月14日と15日に催される大念仏で、「陣ばやし」と「ささら踊り」が演じられる。大念仏は薬師堂前の広場で行われ、薬師堂には向かって右側に総牌、左側に三界万霊位牌を据え、総牌の上にカサブク（傘福）2本を吊し、その左右に切子燈籠1基ずつ吊るす。総牌と三界万霊位牌は透かし燈籠仕立てである。総牌は墓石型の燈籠で、14日には正面に当年の新亡の戒名、15日には過去4年間の新亡の戒名が記される。昔、新亡の各家から傘福と切子燈籠を出していたが、現在はそれぞれ2本吊るされるだけである。この傘の下には、前年の七日盆から今年の日までの物故者の遺品を吊るす。男性の場合はネクタイなどで、女性の場合は櫛やカモジである。傘福は和傘の周囲に黒く卍印を染めた白い幕を垂らしたものである。

夕方5時頃から九人役が中心となって準備を行う。午後6時過ぎに「九人役念仏」が修される。

薬師堂向かって左側に九人役が座り、正面に本福寺と少林寺住職、それに自治会長が座る。右側には新亡の親族が喪服姿で参列する。続いて、住職たちが「盆念仏」といって読経する。その後は「買念仏」となる。鐘と太鼓の奏者が堂右前の莫塵の席につき、九人役の1人が堂の縁に進み出て、施主、祈願内容などを読み上げると、祈願数に合わせて鉦と太鼓を打ち囃す。村人たちは総牌を参拝し、次々に買念仏を申し込む。しばらくして「陣ばやし」「ささら踊り」が演じられ、その後、買念仏が再開されて深夜にまで及ぶ。

相差の大念仏

三重県鳥羽市相差では、毎年8月13日に大念仏が行われる。梵潮寺の境内で大念仏を行い、その後、傘ぶきに新亡の遺品を吊り下げ、提灯を持って浜に行き、そこで念仏を唱えて初盆供養をする。

甲賀の大念仏と鼓踊

三重県志摩市阿児町甲賀では毎年8月13日に大念仏おどと鼓踊かこ（鞆鼓踊り）を行う。

8月13日午後4時から見宗寺下の浜田の浜で、甲賀自治区主催の盆祭行事が行われる。午後4時から梅花講念仏、午後4時半から大念仏、4時45分頃から地囃子、最後に5時30分から鼓踊りが行われる。浜には仮設の小堂のような祭壇が設けられ、甲賀の新亡者の戒名すべてが書かれた総牌が祀られる。4時頃、総牌の手前、防波堤の下に20人ほどの婦人が莫塵などを敷いて座り、左手で掲げた持鈴を振り、右手に持った撥で小さな鉦鼓を叩きながら御詠歌をあげ、新亡者の回向をする。4時半頃、大念仏が始まる。総牌の隣に立てられた槽に据えられた太鼓を叩く。傍らで鉦を叩き、法螺貝を吹き鳴らす中で「あーあむでんやー、あーあむでんやー、なーむあみ、はああーむでんやー」と唱えられる。この後、昔は芝酒の儀（ふるまい酒）があったというが、現在は簡略化されて行われていない。4時45分頃、甲賀公民館から高張り提灯を先頭に大念仏の行列を組んで、大傘1基、傘ぶく4基を捧持しながら太鼓と笛にあわせて浜にやって来る。堤防の上で整列し、大傘や傘ぶくを広げる。高張り提灯2本、付き添いの浴衣姿の少女4人、名のり役の少年1人（桃色の着物に白袴姿で、衿首に巻物を挿している）が進み、大傘が付き従う。その後ろには黒色と赤色の傘ぶくがそれぞれ2基ずつ奉持される。傘ぶく持ちやお囃子役の少年たちは白い着物に白袴姿で、雪駄履きである。傘ぶくごとに締め太鼓が1個ずつ（持ち手と打ち手が各1人）、それに笛が12人ほど付き従う。行列は総牌を祀る祭壇を前に、堤防下に横に並び、地囃子を奏する。提灯を持った新亡の使者2名が行



写真11：甲賀の大念仏



写真12：女性のカサブクに下げるもの



写真13：男性のカサブクに下げるもの

列に対面し、「須磨の若木の桜……」などを謡う。その後、行列は総牌を祀る祭壇前に向かって縦隊で進み、名のりの少年が祭壇前に出て、巻物を広げて節をつけて祭文を読み上げる。5時15分頃に大念仏は終了し、行列を組んで公民館に戻る。

本来、傘ぶくは新亡者の各家から1本ずつ出されていたが、和傘の入手が困難となり、現在は4基の傘ぶくを甲賀自治会が用意するようになった。黒い傘に黒幕の傘ぶくは男性の新亡者を、赤い傘に赤幕の傘ぶくは女性の新亡者を供養するためであるという。現在でも傘の中には女性用の傘ぶくには束ねた黒髪と墓口を吊すし、男性用の傘ぶくには印籠と筆、煙管などを下げている。これは故人の遺品を表しているのだという。これ以外に昔は女性だと和鋏、男性なら墓口などを吊り下げていたそうである。

大念仏の退場と入れ替わりに鼓踊りの行列がやってくる。鞆鼓踊りともいう。紋付き袴姿の世話役2人を先頭に、中打ち3名（白装束）、棒振り2名、鬼3名が進み、ほら吹き男8人、若い衆といって編み笠を被ってコキリコ（短い飾り棒）を持つ女13人が付き従う。昔、若い衆は男性で、人手が足りなくなると女性が加わるようになったという。鬼は鉋屑で作った腰まである額頭を被り、高さ1.5mほどの3段になったシャゴマを背に負い、首から鞆鼓を吊り、筒袖の茶色の上衣に股引をつけ、足袋に草鞋履きである。棒振りは鬼と同様に額頭を被り、茶色の装束を着るが、シャゴマを背負わずに長さ1.5mほどの飾り棒を持つ。飾り棒は小石の入った竹で作られている。ほら吹き男と若い衆は浴衣に編み笠姿である。行列は縦隊のまま、総牌の前に進み、「振り込み」といって、中打ちが総牌前に座って念仏をあげる間、棒振りと鬼は振り込みの技をみせる。その後、全員が縦隊のまま中腰となり、連中は笠を脱いで傍らに置く。念仏が終わると、3人の鬼を中心に円陣を組み、鬼は中央で鞆鼓を打ち鳴らしながら跳躍して踊る。ほら吹き男と若い衆は反時計廻りで進む。ほら吹き男は法螺貝を吹き鳴らし、コキリコを持つ若い衆は「お寺参り」「アヤ織り歌」「阿倍の安名」などを歌う。棒振りは円陣の外で飾り棒を振り回してガラガラと音を立てながら廻る。昔、この鼓踊りは16日にも行われていたという。この甲賀の鼓踊りは新亡者を供養するための大念仏行事のひとつであるという。昔、鞆鼓踊りは旧甲賀村内だけで志島、名田のそれぞれの浜洲でも行われていたが、現在は廃れて、甲賀の鞆鼓踊りが今でも伝承されているだけである。

(4) 伝播する傘鉾

井出幸男氏は「海を渡ったカサボコー沖の島の盆行事と土佐の念仏芸能―」の中で高知県宿毛市沖の島にも故人の霊の依代となる傘鉾が伝えられていることを書き記し、良く似た習俗が伊豆七島の新島にも伝えられていることを紹介している。沖の島は大分県佐伯市米水津の宮野浦・色利浦から日向灘を隔てて東南東約50キロメートルほどの地点にある。沖の島弘瀬の盆行事と新島の大踊のカサボーロクについて、傘鉾を中心にその形態と役割とを紹介する。

沖の島弘瀬の傘鉾

高知県宿毛市沖の島町弘瀬では、隔年で盆の8月16日夜に「傘鉾」と呼ばれる盆踊りが行われ、2年間に亡くなった新仏を供養するために傘鉾を用いる。前夜には女性の唄と太鼓にあわせて、女性たちが踊る。16日の朝、傘鉾作りを行う。昔は沖の島弘瀬を開発して統治していた三浦家の庭で盆踊りが行われていたが、現在は弘瀬港の「みなとふれあい広場」を会場として開催されている。会場中央には櫓が組まれ、編み笠を被った音頭取りが采配を振るって入場し、櫓の上で盆踊りの音頭を唄う。

傘鉾（鎌倉踊り）の歌詞は次の通り。「オミドンボ 南無阿弥どんぼ エイトー エイトー。

おじゃった おじゃった 山伏がおじゃった エイトー エイトー。 南の雲は こう行く雲よ
エイトー エイトー。 畚いわ 畚いわ 山伏は畚いわ エイトー エイトー。臭いわ 臭いわ
山椒は臭いわ エイトー エイトー」

夕刻、会場に集まってきた傘鉾は、音頭と囃子に合わせて動き始める。櫓を中心に円形に並んで右回りに動く。三步前進したら一步後退し、それを繰り返す。傘鉾は白装束の女性が捧持する。持ち手は傘鉾を垂直に立て、その柄を左右にねじって傘鉾を回転させるが、1歩後退の後は1度櫓に向かって静止する。傘鉾は櫓の周囲をゆっくりと3周する。これは亡くなった故人の霊が欲界、色界、無色界という三界を通過して浄土に往く行程を表現するものだという。

本来、傘鉾は弘瀬を開発・統治していた三浦家に伝わったもので、明治維新でその特権を返上するまで、三浦家の占有品であったという。先祖供養のために三浦家が盆の時に使用していたもので、明治維新後に新仏供養の道具として一般島民が用いるようになったと伝える。現在の傘鉾は番傘の柄に2mほどの竹を継ぎ足して高くしたもので、傘の周囲に薄桃色や薄水色の薄布を幕として垂らしたものである。造花や金銀のモール、金銀の色紙細工などをつけたり、桃色のしごきを総角結びにして四方に下げたりする。傘の柄には2本の竹を十字にくくりつけ、その竹に2挺の提灯（最近では懐中電灯などを用いることが多い）を下げて内部照明として、傘の内側に遺影を飾る。

弘瀬の盆踊りは15世紀中頃に始まったと伝え、「オミドンボ」「鎌倉踊り」と呼ばれ、山伏などの変装踊りを組み込んで始まったという。

三浦家による沖の島の開発伝承が伝わっている。鎌倉幕府の重臣三浦大介の孫に三浦新助則久という人物がいたというのである。三浦家は宝治元年（1247）に北条時頼と対立して滅亡している。なお、井出幸男氏によれば、諸「浦家系図」には三浦新助則久の記載はないという。なんらかの罪で三浦新助則久は一族郎党と共に西方へ遁れ、伊予の三津浜から更に船出し、沖の島に「芦のおりのり」から上陸し、峰伝いに島を縦断して、谷尻間の峠と弘瀬との間の仏の峠に居を構え、周囲を開墾して農耕と漁撈に従事して定住するようになったと伝える。そして、新助から九代目になって弘瀬に移住して、島の領主として村君を務めてきたという。

新島の大踊

以上のように盆の傘鉾は、故人の霊の依代としての意味があることが明らかになってきたが、盆の傘鉾で、傘からさまざまな物を吊り下げるのにもかかわらず、依代としての性格をほとんど持たない傘鉾がある。伊豆七島のひとつ、新島の大踊で用いられるカサボーロクである。

東京都新島村は新島と式根島によって構成される。新島の本村は島の中央部西側にある集落で、若郷は島の北部西側の集落で、宝永7年（1711）に本村から移住して成立した集落である。この新島の本村と若郷では大踊という芸能が伝えられており、カサボーロク（傘ぼーろく）と呼ばれる傘が登場する。

新島村本村では8月15日の夕方から長栄寺境内で大踊りが催される。大踊りは盆祭、祝儀踊とも呼ばれる。踊り手は男性で、周囲にはカバという紫色の幕を垂らした笠を被る。紋付きの着物に角帯を締め、その上に真田紐を結ぶ。頭から背後に色鮮やかな長い下げ緒を垂らす。足下は白足袋だけで、履物を履かない。印籠を腰に下げるが、これは踊りの場に入るための証となる重要な持ち物である。まず、会場となる長栄寺に住職と宮司、村長などが迎え入れられる。最後に住職が座ると、檀家総代がお茶を献じる。住職が茶碗を手を持って「はいらっしゃい」と言うと、提灯に先導されて大踊衆が二列になって境内に入場する。列の右側先頭はカサボーロク、左側先頭はカマ（鎌）で、次に笛と太鼓が進みながら囃し、歌い手、踊り手が続く。境内には円形に綱が張られて踊り場が作られている。カマは長い棒の先に鎌を取り付けたもので、縄を巻いてい

る。踊り場に入った一行は左右に分かれ、綱に沿って進み、先頭同士が会おうと、踊り手以外の者は綱の内側を歩いて所定の場所に向かう。輪になった踊り手たちは大踊を開始する。踊りの場の内側と外側には見張り役の者が立つ。大踊では「役所入り踊」「お福踊」「伊勢踊」という演目を踊る。演目が一巡した後、「伊勢踊を所望」などと声が掛かると、その演目を再び踊る。

新島村若郷では8月14日夜に境内で大踊りが催され、盆踊とも呼ばれる。本村とは少し内容に違いがある。笠のカバは本村と違って赤色である。また、鎌には縄を巻かない。大踊衆の入場では、鎌を先頭に提灯、カサボーロク、太鼓、歌い手、踊り手の順となる。反時計廻りに踊り場を一周して、踊り手だけが踊り場に残って大踊を始める。踊師匠が踊り手の輪の外側で待機して、踊りの輪や衣裳の乱れを直す。若郷では「役所入り踊」「備前踊」「青が丸」「伊勢踊」の4演目を踊る。

大踊の演目には室町小唄風の歌詞があるといわれている。大踊りは室町末期から江戸初期に流行した風流踊りの系統で、慶安年間（1648～51）に新島に伝わったものだという。

カサボーロクは大傘の周囲にカバという幕を垂らしたもので、大踊の最中に踊り場の外に立てておく。傘の内側にさまざまな物が吊り下げられている。細く切った布切れ、鏡、鉞、鈴、猿の形をした小さな人形、それに女性の髪の毛の束である。髪の毛は祈願のために奉納したもので、そのようにカサボーロクに吊り下げる物には必ず麻を巻き付け、一ヵ所白い紙で巻いて、その紙に寄進者の氏名を書き記していた。若郷では女性たちが身を清めるためにカサボーロクのカバに自らの名を書き記す。

新島の大踊では、カサボーロクもカマも魔除けと考えられている。盆の傘鉞の系譜を引くものだと考えられるが、ここでは物故者の依代としての意味はない。故人を偲ぶ盆踊りの傘鉞というよりは、風流踊りとそれに伴う大傘（風流傘）という意識が強いと思われる。

（5）盆の傘鉞事例

【事例1】米水津宮野浦の供養盆踊り（とむらい踊り）

旧米水津村（大分県佐伯市米水津地区）の盆行事が旧暦から1月遅れの8月に行われるように変化したのは、昭和45年頃からであるという。

8月13日は精霊迎えの準備をする日である。点灯した提灯を縁側の先に1個吊り下げる。10個ぐらいの燈籠菓子をコヨリでつって、仏壇の前にメ縄のように張る。燈籠菓子とは提灯・打出の小槌・桃の形をした最中の皮のようなものである。昔はホオヅキも吊っていたが、現在は櫛と共に花瓶に生けるようになった。仏壇の前に位牌を並べ、その前に果物や菓子を供え、最初に団子を1対供える。

8月14日は精霊迎えの日である。午前8～9時頃に家族全員で精霊迎えに墓地に行く。小さな子供が迎え提灯といって笹に吊った小さな提灯を持つ。祖先の霊魂は迎え提灯に乗って家に帰るといふ。オに切ったナスビと米と小豆を重箱に入れたミズノハナと肥松を持参する。お墓の前で迎え火を焚く。ミズノハナを撒いて線香を立て、「この提灯にとまってくりー」と言って家に戻る。帰宅したら、御縁（縁側）からはめて（入り）、「今帰ったで、ゆっくりしてくりー」といって、仏壇の前に提灯を置き、線香を立て、水の入ったコップを供える。別に一番茶を供える。家に戻ると、先祖の霊は御膳部に座るといふ。点灯したままの提灯を仏壇近くの縁側に次の日まで置く。御膳部の献立は次の通り。ヒラ（平椀）に煮メ（油揚げ・高野豆腐・蓮根・昆布等）、ツボ（壺皿）に胡麻豆腐、汁椀には味噌ツユ（白豆腐を切り込んだタマフ・椎茸・ズイキを具にした味噌汁）、猪口に大根の漬物・白あえ・なます、そして茶碗には白ご飯を盛る。

14日から15日の朝には「仏まいり」と称して親しい親戚が地区内の新仏の家を巡って、線香を立てて廻る。夜になると、「お夜食」といって茹がいたソーメンに椎茸ダシの精進ツユをかけて供える。そして、お供えの茶を打ち代えて二番茶を供える。初摘みではなく、二番摘みの茶を供える人もいる。

8月15日は精霊送りの日である。昼食の後に土産団子を作る。水と膳部を新しくするが、朝の茶はそのままにしておく。タナアゲという4方か2方をつまんだ団子を作り、黄な粉まぶしにして供える。午後4時頃、提灯を仏壇の前に置く。線香を立ててから、提灯とミズノハナと肥松を縁側から出し、外で待つ家族が受け取る。墓地に行つてミズノハナを撒き、水をホコウ（供え）て線香を立て、肥松で送り火を焚く。

8月16日は精霊流しの日である。新盆の家では精霊船を用意しておく。器用な人は自作するし、佐伯市の仏具屋でも売っている。昔はムッカラ（麦捍）船もあったが、現在は長さ3～4尺（90～120cm）・幅1尺～1尺4寸（30～42cm）の木製の船が多くなった。昔は小麦を栽培している農家が、麦捍製の霊船をリヤカーに載せて売りにきていた。精霊船には西方丸と書いた帆を立てる。普通、精霊船を流すのは16日になったばかりの午前零時過ぎである。人の目に触れるのを嫌って、早朝流す人もいる。昔は子供が精霊船を拾って玩具にしていたものだった。一般家庭では、提灯を吊った笹・灯籠菓子・ソーメン・団子・膳部の御馳走を箱に入れて海に流す。昔は里芋の葉に包んで流していたという。

昔は盆過ぎの16日に盆踊りをしていたが、現在は15日の夜に行う。20日に地藏様踊りをする。15日に盆踊りをするようになったのは、新盆になって増加した里帰りの人にあわせたからである。もし15日に雨が降っても、16日に実施できる。供養踊りの時には盆帰りする人が多い。なお、この地域にはヨリ年（閏年）、あるいはヨリ月には墓石を立てないという風習がある。午後8時頃から供養盆踊りを行う。

盆踊りの会場は公民館前の広場で、中央に音頭棚を立てる。音頭棚は高さ約4mの檣で、上部に音頭取りが立つ床を張って手すりをつける。下部にも床を設け、囃し子たちが座る。音頭棚の傍らに太鼓をすえる。昭和57年頃までは音頭棚の下に太鼓を立てていた。音頭棚の周辺には、南方だけ残してコの字形に棚を巡らす。棚には物故者の位牌と遺影を供える。遺影の前にシキシマンジュウやオハギを1対ずつ供えた。シキシマンジュウとは、水に漬けた米を石臼で挽いて粉にしたものを蒸して臼で搗き、四角くヌベテ（延して）から中に餡を置いて四方の角を畳み、日の丸のように中央を紅で染めたものである。

盆踊りの棚の中央に、左から「戦傷病没者霊」「宮野浦各家先祖代々之霊位」「江河魚鱗離苦得楽」と書いた大きな位牌を並べ、延命地藏石仏を祀る。供養盆踊りでない時には遺影などを祀らないが、これらの大きな位牌類は供えられる。

新仏の家では傘鉾を出す。傘鉾とは開いた傘を物故者の着物で覆い、兵子帯などで縛り、竹竿の先に装着したもの。傘は物故者が使用していたものを用いる。竿の途中に提灯を結び付ける。長い竿を使う人がいて、移動に都合が悪いので、平成元年には長さ3mに制限した。昔は蛇の目傘（和傘）だったが、最近はコウモリ傘（洋傘）が多い。家から傘を持参する時、竿に付けた傘を傘深に（少し広げて）差してくる人もいるし、広場で竿に結び付ける人もいる。物故者の遺影近くの棚の柱に傘鉾を縛りつけて立てる。

以前には扇子で口元を隠ながら口説きを唄う人もいた。伴奏は太鼓だけである。踊り方は全曲同じで、右手に団扇を持って踊る。音頭棚を中心に三重ぐらいの輪をつくり、時計廻りの方向に踊る。最近、他地方の影響を受けて、飛び歩くような動きの激しい踊り方をするようになった。普通、踊り手が音頭に合わせて囃しを唄うが、檣の下の子供たちも1人の大人の囃しに合わせて

唄う。

傘鉾を持った遺族が輪になる。傘鉾の提灯に点灯する。現在は電池を電源にした明かりだが、昔はローソクを用いて、盆踊りをしている間中、点灯し続けていた。最後に「切り音頭」が歌われ、遺族たちは音頭棚を中心に3周する。遺族は悲しみを表すためにゆっくりと歩く。3周回ったら棚の前で待機して、切り音頭が終わり次第、帰宅する。切り音頭の終了後、広場では亡者が踊るといふ。切り音頭終了後まで踊ると、死んだ人が憑くといわれており、人々は急いで帰る。フルイの目をとおして見ると、亡者の踊る姿が見えるという。

物故者の霊は傘鉾の上に乗っており、帰宅途中で傘鉾を傾けると、そこに霊が落ちてしまうので、出来るだけ垂直に傘鉾を支えて運ぶ。家に戻ると、縁側から傘鉾を捧げ入れ、帯を解いて着物はずす。

【事例2】色利浦の供養盆踊り

大分県佐伯市米水津地区色利浦では8月15日の夜に供養盆踊りをする。

8月13日は精霊迎えの準備の日で、灯笼菓子・ホウズキ・盆花等で仏壇の飾り付けをする。ヒオテ（日没）後、点灯した提灯を縁側に吊る。仏壇に供える団子は宗旨によって違う。浄土真宗は真ん丸で、浄土宗はひしゃげた団子で、いずれも三角錘状に盛る。浄土真宗では団子、お仏飯、10束ほどのソーメン（乾麺）を供える。盆花は小さな檜に花を混ぜたものである。初盆家庭では仏壇の前に親戚などから送られた盆灯笼や籠盛りを並べる。

8月14日は精霊迎えの日である。日没後、墓地に精霊を迎えに行き、墓前にロウソク、線香、水を供えて肥松を焚く。

14日から15日にかけて、昼から夕方間に初盆の家に地区の人たちがお参りする。

8月15日は精霊送りの日である。日没後、家の近くで肥松で送り火を焚く。

8月16日は精霊流しの日である。早朝、基幹集落センター近くの海岸で精霊流しをする。あらかじめ、新仏の家では漁業組合に勤める船大工に頼んで、木製の精霊船を製作してもらい、8月1日頃から仏壇の前に飾っておく。精霊船の全長は4～5尺で、晒木綿の帆とトモに西方丸と書く。帆は自作である。精霊船に団子や果物などのお供物を乗せて、火のついた線香を添える。昔は木造船以外にムッカラ（麦捍）で作った船もあった。夏の朝にはニシアシ（西嵐）という西からの風が吹くので、精霊船は沖にすぐ流されてしまう。昔は小船で乗り出して、子供や孫の玩具に拾って来る人もいた。一般の家では菓子箱や里芋の葉で供物を包んで流す。

以前は14日と15日の両日の夜に盆踊りをしていたが、最近は15日だけになった。見物人が増えたが、踊り手が減少したのが原因であるという。盆踊りは旧暦で行った方が都合が良かった。麦や唐芋を収穫した後で、15日前後の満月の頃は出漁できないからである。

盆踊りの会場は立岩神社下の宮の下（広場）だったが、狭くて踊りの輪が三重や四重になるので、昭和55年に埋立地に基幹集落センターが建てられてから、その前の広場で行うようになった。盆踊りは午後8時頃から始まる。

供養盆踊りはトモライ（弔い）踊りともいう。旧暦閏年に行い、三年に一度めぐってくる。広場の中央に音頭棚を作り、周囲に祭壇をめぐらせ、その外に太鼓を置く。祭壇に物故者の位牌を供え、その前の敷物に遺族が座る。真宗の大願寺の壇家は位牌の代りに過去帳を使うので、戒名を書いた紙を祭壇に張っていた。現在では白木の位牌を用いることもある。宮の下で踊っていた頃は山側の倉庫の前に祭壇を設けていた。

祭壇の前に傘鉾を立てる。竹竿の先に蛇の目傘をつけて、その柄に物故者の着物等、例えば浴衣やヒトエモ（単衣物）、帯、ネクタイなどを結び付ける。そして、開いた傘の傘骨の先に細く切った障子紙に線香を糊付けしたものを一本ずつ下げる。

最近(昭和末頃)、立て幟を持つ班長の後に続いて各班(隣保班)ごとに踊るようになった。これは踊り手を増やすためだという。最後の「切り音頭」の前に、「アイノマ(合いの間)」をいれる。その間に物故者の遺族は傘鉦を倒して、線香に火をつける。アイノマでは音頭取りは唄わず、太鼓の伴奏で踊り手の一人が唄う。遺族たちは傘鉦を持った喪主を先頭に、位牌、遺影の順で踊りの輪に参加し、同じ隣保班の踊りの列に加わる。傘鉦の線香が消える頃に切り音頭も終わり、傘鉦を持って帰宅する。

【事例3】波切の大念仏

三重県志摩市大王町波切では、昭和41年頃まで年寄り五人衆(爺々等ともいう。『大王町史』では高野聖の流れであろうと推測している)と呼ばれる人たちが、葬式の世話をして十三仏を祀り、光明真言や真言陀羅尼を唱えて大念仏の世話もしていた。現在は新亡(新亡者)の家が大念仏の執行組織を作る。3カ寺のうち年番制で1カ寺が当番寺となり、1ヵ月ほど前に新亡の家の人たちを呼集して第1回の総会を開き、まず執行組織の発足となる。各寺ごとに2名ずつの世話人が選出され、この6人の中から代表者と会計を互選で決める。その後、第2回総会を開き、「名呼び」などの諸役と予算を決める。ただし、「楽」と呼ばれる大太鼓と鉦の打ち役は経験者に頼み、念仏を唱える念仏婆さんも依頼する。

8月6日の夕方に精霊迎えがある。新亡の家では草履を持って墓地に行き、新霊を迎えてくる。座敷に燈籠を据えて、その上に位牌を祀る。燈籠は木の棧で組み立て、薄紙を張って作られ、三段から七段になっている。両側にキリコ(切子燈籠)や提灯を吊し、果物や菓子などを供える。門口には棒を立て、笹の葉を十文字に縛りつけて、日月の形に刳り貫いた軒提灯を吊る。

8月7日～12日には燈籠拝みが行われる。7日の夕方から、有縁の人たちが新亡の燈籠にお参りに来て、現金や物品を仏前に供える。念仏や御詠歌が唱えられ、鈴や鉦の音が絶えないほどである。この日には牡丹餅を作って、初盆供養として親類縁者に配る。

7日には元屋に祭壇を設けて総牌を安置し、その両脇に切子燈籠を下げていた。元屋は、男性の新亡のうち、最高齢者の者の家が依頼されて勤めるのが原則であったという。総牌とはその年の新亡の戒名をすべて記した紙燈籠である。元屋が代表して総牌を祀っていた。この元屋制度は平成4年に廃止となり、大念仏当日だけ総牌を祀るようになった。

8月12日は一般家庭の精霊迎えである。夕方に藁草履一足を持って墓地に行き精霊を迎える。20cm角の板を棚として付けた竹を門口に立てる。盆の三日間はこの棚に供物を載せて餓鬼に施す。小机に三界万霊と書いた牌を立てる家もある。仏壇に先祖の霊を迎えて野菜と菓子をお供え、13日から15日まで三度の食事を供える。精霊はハスの葉(里芋の葉)に乗って来ると言われ、里芋の葉を仏壇の花瓶に生け、精霊送りの時に墓地へ持って行く。

12日には大念仏会場となる魚市場前の広場東端に念仏小屋という大型テントを建てる。

8月13日～15日には水向けとも呼ばれる施餓鬼が行われる。13日に大慈禅寺、14日に仙遊禅寺、15日に桂昌禅寺でそれぞれ行われる。各家では、それぞれの檀那寺の三門施餓鬼に参拝して祖霊に水向けをする。新亡者の施餓鬼は、それぞれの檀家で行われ、親戚一同が参列する。戦前、水向けの時には若い漁師たちが本堂に詰めかけ、三門施餓鬼の読経が始まると、施餓鬼棚に競って登り、水槽に注ぎ込まれたアラミズ(新水)をシキビ(檜)の葉で叩き合って、ずぶ濡れになったという。

かつては大念仏で五人衆が鉦を打って念仏を唱えていた。広場の東端に総牌屋形(念仏小屋)という大型の家型テントを建てる。総牌屋形に総牌と切子燈籠などを運び込む。総牌の前には大きな霊供膳を据え、区切られた柵目ごとに供物を供える。大念仏会場の入口には迎え提灯を建てる。道路を挟んで青竹2本を立て、その間に張り渡した縄に白張提灯を新亡の数だけ吊す。会場

となる広場の北側と南側に新亡の家の区画が設定され、新亡の家の人たちは折り畳み椅子やビニールシートなどを敷いた上で待機する。開始時間になると、代表者が挨拶をする。故人に最も近い近親者が、用意していた傘ぶくを開き、親類縁者数名を引き連れて広場に出る。傘ぶくを持った人たちが、槽下の名呼び、太鼓、鉦を中心に輪になる。幟持ちも同様に出て、傘ぶくの輪の内側にもうひとつ輪を作って並ぶ。幟は白紙に大きく戒名を書いたもので、少年が持つことになっている。昔は、白衣に白の袴がけをして、幟を持って大人の肩車に乗って出たものだという。太鼓と鉦が打ち鳴らされると、傘ぶくと幟の輪は反時計廻りでゆっくりと歩き出す。傘ぶくの後ろから女性が団扇であおぐ。昔は幟の輪の内側に中踊りと呼ばれる踊り手が廻っていたという。最初に大念仏を受けるのは、元屋の新亡（最高齢で亡くなった男性）である。名呼びが新亡の名を呼ぶと、太鼓と鉦が打ち鳴らされ、遺族が名呼びのところに行って焼香する。一霊ごとに太鼓を33打（昔は66打）鳴らす定めになっている。打ち終わると、太鼓打ちが合図して、死亡日時順に名呼びが新亡の名前を読み上げ、同様に太鼓と鉦を打ち鳴らす。その間、傘ぶくと幟を持つ人は休むこともなく歩き続ける。途中、「ガチャガチャを始めて下さい」という声がかかると、子供たちは一カ所に集まって、幟の打ち合いをする。幟の紙がちぎれて無くなると、子供たちは幟の竿を捨てて輪の外に出る。傘ぶくの行進はそのまま続き、親類縁者や友人、仕事の取引先の人など、友人知人が次々に交代して捧持して供養する。4時頃から3時間ほど輪になって歩き続ける。3時間ほどして、最後の貫念仏が終わると、大念仏の行事も終了する。

大念仏が終わると、その夜から16日の夜まで同一会場で盆踊りが催される。昔は旧暦7月14日から20日まで青年団が主催して行っていた。明治時代には数カ所で分かれて踊っていたが、大正期頃に天満小西の墓地の弔い場で踊るようになり、波切墓地ができた後には、そこの弔い場で踊っていた。午後7時頃に子供の踊りから始まり、午後11時過ぎまで踊る。槽の上に音頭取りが登って踊り口説きを歌い、太鼓が打ち鳴らされる。西国三十三カ所の音頭から始まり、鈴木主水、白井権八、石童丸などの踊り口説きが歌われる。この盆踊りには、大念仏の会計から助成金が出ており、大念仏に伴う精霊供養の踊りと意識されていることは間違いない。

8月15日夕方に一般家庭では精霊送りを行う。ミヤゲ団子と米、供え物の菓子や果物、南無阿彌陀仏と書いた五色の紙幡3枚を結んだ麻殻と麻殻杖一本を持って、墓へ精霊を送りに行く。昔は削り松を墓地入口の篝火籠に入れて燃やし、帰宅してから門口でも燃やして送り火にした。また、二十日盆まで軒先の提灯を灯した。

8月16日は新亡者の精霊送りをする。午前中、親戚一同が燈籠に飾っていたキリコと提灯などを持って墓地に行き、墓に供える。波切では盆行事が新暦月遅れになったのは昭和18年からで、それまでは旧暦7月20日に行っていた。

【事例4】船越の大念仏

8月6日には北の大川で、笹舟にキキョウやナデシコなどを添えて前浜に向けて流した。これは七夕と精霊迎えがひとつになった行事であるという。

8月12日は盆節季といい、これまでに貸借関係の決済や中元の贈答、初盆の家への供物などを済ます。この日に精霊を迎える準備が行われるが、新亡家では仏前に切子燈籠一対を飾り、元屋に総牌を祀る。

8月13日は水向けといって、祥雲寺の施餓鬼に出席して、白紙で巻いたミシャゲ花の花束で水を精霊に手向け、家に戻って仏壇に「水の子」といって刻んだズイキ（里芋の茎）を水に浮かべて供える。また、オチツキといって、牡丹餅や黄粉餅、アラメ菜（アラメと大根葉を酢で和えたもの）、カラノカガミ（心太）、素麺、野菜の煮物、テンジ（ヒジキとナス、カボチャの酢味噌和え）、味噌汁などを取り替えて供える。午後3時から公民館前の広場で大念仏が催される。

8月14日早朝、一家総出で墓参りをする。

8月13日から15日にかけて船越の盆踊りが行われる。昔は浜で踊っていたが、現在は公民館広場で催される。午後8時頃に始まり真夜中近く続く。仮装盆踊りもあり、賞金が出る。盆踊りの音頭は「踊り口説き」と呼ばれ、「鈴木主水」「白井権八」「石童丸」「阿波の鳴門」「八百屋お七」「国定忠治」「伊勢油屋騒動」などが歌われる。

8月15日には送り施餓鬼と精霊流しがある。昼前に「日中参り」といって、ミヤゲ団子や麻殻の杖を持って祥雲寺に詣でて精霊送りをする。その時、家を出る時に門火を焚く。寺では午後4時から施餓鬼念仏を行い、人々は水向けして家に帰る。夕方、盆の間に供えていた茄子の馬や胡瓜の舟、それに西瓜、薩摩芋、瓜、柿、梨などを前浜で流し、線香一束を焚いて海に向かって拜む。これは海の彼方に他界があると言われていたからだという。

8月20日は二十日盆で、盆の最終日であるという。燈籠とキリコ（切子燈籠）を前浜で焼却する。盆踊りを短時間催し、櫓を撤去する。この日、船越神社境内表忠碑の前で組長会主催の戦没者慰霊祭が行われる。午後3時から青年会主催の相撲大会が行われていた。また、虚空蔵堂では百万遍法会が開かれていたが、現在は行われていない。巨大な数珠をみんなで繰り返しながら念仏を唱える行事であった。虚空蔵堂から出て、地区内を一巡した。主な辻には多くの人たちが参集して、数珠を押し頂いて念仏を唱えて息災を祈念した。

【事例5】甲賀の大念仏（鼓踊）

三重県志摩市阿児町甲賀では毎年8月13日に大念仏と鼓踊（^{こおどり} ^{かっこ}鞆鼓踊り）を行う。

新亡者の家の人は、7月末までに寺や最年長者の許に行き、施餓鬼や水向けなどの行事の経費の打ち合わせをする。7月7日には子供たちが集まって七夕をして、この日から高燈籠を吊す。8月10日までに墓掃除を済ませる。

8月13日、仏壇に高坏に載せた菓子と素麺を供える。新物の胡瓜、茄子、西瓜、柿、芋、ヒョウナ、干瓢なども供える。門近くにヘガキダナ（施餓鬼棚）を設ける。櫓と色旗を立て、下に小礫を並べる。棚に敷いた里芋の葉に仏壇から下げた供物を載せ、線香を立てる。小割した松などを燃やして迎え火を焚く。

盆の期間中、新亡者の家では、座敷に戒名を記した位牌を祀り、切子燈籠や傘ぶくを供えた。親戚や近所の人たちが供物を持ってお参りに来たものであった。現在はサカモト（阿児町史では「酒元か」と推定している）や世話人の家に、甲賀のすべての新亡者の戒名を書いた総牌を祀る。また、燈籠も岐阜提灯に簡略化され、傘ブクも各家で用意するのではなく、現在では甲賀全体で4本用意するようになった。

13日と14日は見宗寺、福満禅寺、妙音寺など各寺で施餓鬼が行われる。その年の新亡者と三界万霊に対して、甲賀の各家から水向けに寺へに参る。

8月13日午後4時から、見宗寺下の浜田の浜で、甲賀自治区主催の盆祭り行事が行われる。午後4時から梅花講念仏、午後4時半から大念仏、4時45分頃から地囃子、最後に5時30分から鼓踊りが行われる。

8月13日から16日にかけて、夜には盆踊りが行われる。13日と15日は午後8時から、14日午後7時半からは盆踊り仮装大会が行われる。

8月15日午後5時から大念仏がもう一度行われ、5時20分から精霊送りが行われる。寺から貰った精霊（旗）と先祖代々の札、それに線香と供花を持って浜に行き海に流す。

【参考文献】

本田安次『東京都民俗藝能誌』錦正社・1985。

段上達雄「米水津の供養盆踊り」『大分県の民俗芸能—大分県民俗芸能緊急調査報告—』大分県教育委員会・1991。

井出幸男「海を渡ったカサボコー沖の島の盆行事と土佐の念仏芸能—」『黒潮のめぐみ』高知大学編・高知新聞社・1993。

『大王町史』大王町・1994。

『阿児町史』阿児町・1977。

『志摩町史改訂版』志摩町・2004。

「波切りの大念仏」『三重県の民俗芸能』三重県教育委員会・1994。

「立神の盆行事」『三重県の民俗行事報告書1』三重県教育委員会・2005。

「ダンボ（旧英虞郡浜嶋村）」『三重県の祭り・行事』三重県教育委員会・1997。